

方丈記『安元の大火』確認テスト 解答・解説

■ 解答・解説

- 問1 「かよ」は「～とかいったよ」「～であったかなあ」と、はっきりしない伝聞や記憶を、念を押すように・詠嘆的に述べる気持ちを表す。日付をやや漠然と回想する語り口。
- 問2 ・「ざり」…打消（助動詞「ず」の連用形「ざり」）。／・「し」…過去（助動詞「き」の連体形「し」）。「静かでなかった（あの）夜」の意。
- 問3 （都の）東南から、西北（の方角）へ燃え広がった。／本文に「都の東南より火出で来て、西北に至る」とあり、出火点から逆方向へ斜めに延焼したことを示す。
- 問4 ・「に」…完了（助動詞「ぬ」の連用形）。／・「き」…過去（助動詞「き」の終止形）。「（一夜のうちに）塵や灰となってしまった」の意。
- 問5 樋口富の小路（樋口小路と富小路の交わるあたり）。舞人を泊めていた仮屋から出火したと述べられている。
- 問6 ・品詞名…助動詞（比況の助動詞「ごとし」の連用形）。／・訳…扇を広げたように（先が）末広がりになった。「ごとく」は「（あたかも）～のように」と直喩を表す。
- 問7 「うつし心」＝正気。確かな・しっかりした心。「（炎の中にいて）正気でいられようか、いや、いられない」の意。
- 問8 「や」は反語の係助詞（終助詞的用法）。「うつし心あらんや」で「正気でいられようか、いや、いられはしない」と、反語によって正気を失う様子を強調している。
- 問9 ある者は煙にむせんで倒れ伏し、ある者は炎に目がくらんで（炎にまかれて）たちまち死ぬ。／「むせぶ」＝むせる、「まぐる」＝目がくらむ・正気を失う、「たちまちに」＝すぐに。
- 問10 「さながら」＝すっかり。そっくりそのまま。残らず。「七珍万宝がすっかり灰になってしまった」の意。
- 問11 その損害（費え）は、どれほど（多大なもの）であろうか。／「費え」＝損失・出費、「いくそばく」＝どれほど。莫大な損害を詠嘆的に問いかける表現。
- 問12 完了（または存続）の助動詞「たり」の終止形。「（公卿の家が十六）焼けた」の意。
- 問13 ほか／「外」。それ以外のもの、の意。
- 問14 いつ焼けるとも知れない、たいそう危険な都の中に家を作るために、財宝を使い果たし、あれこれ心を悩ませること。そうした人間の営み（住まいづくり）を、はかなく無意味（愚か）だと述べている。
- 問15 ・係助詞…「ぞ」。／・結びの語…「侍る」。活用形は連体形。係助詞「ぞ」を受けて、文末が終止形「侍り」ではなく連体形「侍る」で結ばれている（係り結び）。
- 問16 都のうち、三分の一（「三分が一」）に及んだと述べられている。

問17 無常観／「無常」。世のすべては移り変わり、はかないものだとする仏教的なものの見方。

問18 ・漢字…鴨長明。／・読み…かものちょうめい（かものながあきら、とも）。

問19 随筆。

問20 ・清少納言の作品…『枕草子』。／・兼好法師の作品…『徒然草』。この二つと『方丈記』を合わせて「三大随筆」という。

問21 （例）「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。」／流れ続ける川の水が常に入れ替わるように、この世のすべては移り変わってとどまらない、という無常を説く一文。
